
リリカルな世界に転生したらしい

練炭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルな世界に転生したらしい

【Nコード】

N8574Z

【作者名】

練炭

【あらすじ】

あ、ありのままに起こった事を話すぜ。

俺は自分の部屋で寝ていたと思ったら、気が付いたら全く知らないところにいたんだ。

な…何を言っているのかわからねーと思うが、俺も何をされたのかわからなかった…

頭がどうにかなりそうだった…催眠術だとか幻覚だとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。もっと恐ろしいものの片鱗そう転生というのを味わったぜ…

ってな感じでリリカルなのはの世界にヴィルヘルム・エーレンブルグの能力＋容姿をもって転生してしまった人のお話。
無計画＋なんとなくその場のノリで書いてしまったものです。

気がつくと俺はベイになっていた（前書き）

その場のノリと勢いで書いてしまったものです。
反省はしている、だが後悔はしていない。

※決してベイ本人ではありません。

気がつくと俺はベイになっていた

ん?・・・さみい・・・

寝ていた俺に突然風が吹き付ける。

「ううゝ寒い・・・」

おそらく俺の横、もしくは下にあるであろう布団に手を伸ばそうとするが

「あれ・・・ねえぞ」

そう、あるであろう所になく、俺の行動を嘲笑うかのようにさらに強く風が俺に吹き付ける。

「だあー分かった、起きりゃいいんだあろ。起きりゃあ・・・
ああ? 何処だここお」

眼が覚めると、青い空、緑の大地、そして俺の枕となっていた木の根・・・どうゆうことだあ

つーか眩しいんだよ太陽が! 手前えなんか雲に隠れてろお。マジ太陽光浴びてるとなんかダリィし・・・

つーか本当にここ何処だよ。俺は自分の部屋で寝てたはずだぜ。なのに何でいきなり訳の分からんとこにいった?

とりあえず現状を確認するために辺りを見渡すとおかしな物が眼に

映った。自分の髪だ。

「何で髪が真っ白になってんだあ！オイ！！」

思わず我が目を疑った。本来の髪は日本人特有の黒髪だったのに今見た限りではこれでもかって位真っ白だ。

そしてもう一つおかしな点に気づいた。声と服装だ。

俺が好きなあのキャラの声＋軍服

俺が考えている事を確認するべく、俺は自分を写す物を探した。

幸い先日雨だったのかは知らねえが大きめの水溜りを発見し覗き込んだ。

「なんでだよ・・・なんで俺がベイになってんだあアアアアアアアア
ア！！！！」

そこに写ってたのはDies iraeに登場する「串刺し公」カズイクル・ベイとヴィルヘルム・エーレンブルグの姿をしている俺だった。

「なんでだよ・・・まるで意味が分からん・・・誰か説明しろよオイ・・・
ああ？」

無意識に入れたポケットに何かが入っているので出してみた。

「なんだこれ・・・手紙い？」

文面はこうだった。

眼が覚めたみたいだね。これを読んでるって事は自分の現状を確認できたんだね。

おめでとう君は『ヴィルヘルム・エーレンブルグ』に進化した。

ぶっちゃけて言おう君は転生したのだ。世界はリリカルと言えぶんかるはずだ。

やったねベイちゃん。主人公と同じ年齢だよくおいやめろ

因みに今の状態は変身制御だから解除すれば元に戻るよ。軍服も同様に任意で装備・解除ができる。

さて君がいる世界だけど原作によく似た世界だ。とはいっても原作とあんまり変わらないよ。

なので好き勝手暴れてもかまわないよ。原作ブレイクするもよし、ハーレムを作るもよし。

後自分で訓練するようにいつか来たるべき戦いのためにね。

では第二の人生存分に楽しんでくれ。

b y 神

•
•
•

・
・
・
・
・

なんだこりゃあアアアアアア！！！！

君は『ヴィルヘルム・エーレンブルグ』に進化したって俺はポケ○ンかぁ！？

しかもリリカルな世界だぁ！

いつか来たるべき戦いのためにねって闘う事前提かぁ！

怒りに任せて紙を破ろうと力を入れようとしたそのときこんな文字が現れた。

追記

おっと能力の説明するのを忘れてた。

能力は原作と一緒にだよ。渴望も変えちゃったテへ☆

ただ原作そのままだと無双過ぎるからちよつと変わってるけど勘弁してね。

それと君の他にも転生者はいるから気をつけた方がいいよ。

・
・
・
・
・

突っ込みどころ盛り沢山だがスルー推奨だな・・・

要約するとこんなかんじだ。

聖遺物とその使用者は聖遺物にしか破壊できない。

という法則が存在するが高位の魔力攻撃なら破壊する事ができると改変されている。

今の俺でも魔王少女のO・H・N・A・S・Iブレイカークラスなら耐えられるらしい。

やっぱチートだなあオイ・・・

エイヴィヒカイトは燃料に魂を使用し、一度聖遺物を所持したら殺人をし続けなければいけない。

聖遺物に魂を吸収させることを可能とし、吸収すれば吸収するほど強化される。

となっているが。

燃料は魂ではなく魔力。別に殺人しなくてもいいらしい
聖遺物にリンカーコア？だっけか・・・を吸収させることを可能とし、吸収すれば吸収するほど強化される。

まあ、こんなところか。

原作介入・・・神の掌で踊るようであんまし乗る気ではねえが助け

れる奴は助けてえしな。

まあ、隠れて助けますかねえ・・・他の転生者に見つからないように。

気がつくと俺はベイになっていた（後書き）

こんな感じで大丈夫か・・・

なんか心配だもう一回diesやって来るべきか？

誘拐は計画的行えよ・・・(前書き)

連投ー！

誘拐は計画的行えよ・・・

side 刑士郎

まずは自分の家に戻らないといけねえな。

ああ？家があんのかって？

あの手紙によるとどうやら有るみたいだ。

マンションらしいがな。

つーかどっち行ったら町に着くんだよ。なんで家にいないんだよ。

あの神流出に到った暁にはぶっ殺してやる！

そう決意した俺に突然車特有のエンジン音が響く。

「結構離れてんなあ。まあいいこれでやっと町に行けるんだあ待ってやがれ、今行くからよお・・・」

「ヒヤッハー！待ってろよ町人A・・・臭う臭うぜ町人Aこの先にいやがるなあ・・・クククハハア！その先かあ！捉えたぞおオオオツ！！」

車が止まった先の廃墟らしき所の入り口に向かって全力で掌底を叩

き込む。

ドゴン！

扉どころか壁さえもブチ抜いてその場に入ると

「ああ？何してんだ手前えら」

そこには黒ずくめの男数人＋縄で縛られ、服が破かれなんか布で口を塞がれている少女達がいた。

side out

side 少女

ゆ、油断した・・・

迂闊だったわ、ちょっと油断してたら後ろからやられるなんて・・・！

「アリサちゃん、どうしよう・・・」

アリサと呼ばれた少女はこう返す。

「どうしようもこうしようもないわよ・・・助けが来るのを待つしかないわ」

助けに来るかも分からないけど・・・どうしよう。すると、数

人の男が私たちを見ていた。

「へっへっへ・・・バニングス家と月村家の令嬢だ・・・」

「高く売れるなあ」

「ちょっと！放しなさいよー！」

「馬鹿かお前は、お前らは身代金を取った後売られるんだからなあ、なあ兄貴」

「そのとおりだ、まあその前に味見するのも悪くねえな・・・」

男たちが迫ってくる。

「寄るな！このロリコン！」

「強情な女だな・・・ならまずこっちの大人しいお前からやってやる」

「きゃああ！？」

——ビリビリッ！

すずかがロングスカートを破られる。つく！

「ひひひ・・・恐ろしくてさすがに声が出ないか？」

う、うう・・・

ドゴン!

「じゃあ、いただきまーぶへえら!？」

さすがを襲おうとしていた男が倒れ気絶する。

突然扉どころか壁さえもブチ抜いて来た軍服を着た男がこう言い放った。

「ああ? 何してんだ手前えら」

私は目を丸くする。

え? 助けに来てくれたんじゃないの?

side out

side 刑士郎

あゝこれってあれか誘拐現場ってやつか・・・それにしちゃーお粗末だな。

何てったって10人位しかいねえし、しかも数人はなんでか知らんがノビてるし(ブチ抜いた時の破片が頭に直撃しました)

「なんだ! てめえ!」

リーダー格の男が言うてくる・・・正直なんて答えようか・・・これにするか。

「通りすがりの串刺し公だ」

カズイクル・ベイ

そう言っただけは一瞬で少女達の目の前に行く。ってかコイツらアリサ・バーニング？と月村すずか？だよな・・

「な、何!？」

オレンジ？金？の髪を持つ少女は警戒したように言う。

「よオオしよし、いい子にしてな？すぐに終わらせてやっかよお」

そう言っただけ俺は上着を脱ぎ青とゆうか青紫髪の少女にかける。

「え？その・・ありがとうございます／＼」

「気にすんな」

自分の現状を確認したのか、顔を赤くしてお礼を言って来たようだ。

振り向きベイといったらあの台詞を言うしかねえよな。

「ヴィルヘルム・エーレンブルグだ」

「は?」

「名乗れよガキ、戦の作法も知らねえか」

「・・・なめんなガキ!」

男たちが襲い掛かる。とりあえず身体能力のみでやるか・・・襲い掛かる男たちを一撃で地に沈める。

「死ねえー」

・サブマシンガンか！・チッ！俺が避けるのは簡単だが避けたら後ろにいるアリサ？達に当たっちゃおう。しかたねえ。

速攻で近づき手刀で銃を払い、男の首に手刀を放ち気絶させた。

やっぱチートだなこの体ほとんど感覚で動いている。

たしかベイって生き抜くために培われた戦闘技術で、経験や勘で相手を圧倒することもある・・・だっけか。

「オイ、無事か？嬢ちゃん達」

「え、ええ何とかね・・・どうしたの？すずか」

「え？ううん、なんでもないよアリサちゃん。」

ぎこちなく返事をする二人・・・あれか？俺の容姿が怖えのか？

「後は警察に任せるとして・・・とりあえず家まで付き添うぞ。こんな事があったんだ2度目はねえとは思うが」

「・・・そうね、お願いするわ」

「・・・お願いします」

少し迷いながら返す。まあ、当然の反応だな。

「諒解、んじゃ行くか嬢ちゃん達」

廃墟を出ようとするが・・・

「ちょっと待ちなさい（待ってください）」

「ああ？どうした忘れモンか？」

「さっきから嬢ちゃんって、私の名前はアリサ・バニングスよ嬢ちゃんなんかじゃないわ」

「私は月村すずかです」

「・・・さっきも名乗ったがヴィルヘルム・エーレンブルグだ、呼びにくかったらベイって読んでくれ」

アリサ、すずか」

・・・イキナリ名前は不味かったかなあ、と思ったら二人の顔が花が開いたかのような笑顔になった。

「じゃ、じゃあさっさと行くわよ！ベイ！」

だがしかし若干声が上ずってる・・・やっぱ怖えみたいだ。

逆にすずかは安心したかのように俺の手を握ってくる。なんでだ？

こうして俺等はその廃墟らしきところを後にした。

・・・ノリでヴィルヘルムと名のつちまった。反省はしている、だが後悔はしていない。

転生者との出会い（前書き）

何時の間にかお気に入りが増えてる・・・
ありがとうございます。

転生者との出会い

side 刑士郎

とりあえず二人を送って行った。

途中でお礼がしたい。とか言って来たが丁重にお断りしてきて路地裏に出た。

涙目＋上目遣いの最強コンボをしのいだ俺は今なら流出位階にいけそうだ。

・・・冗談だがな、それだけで流出までいけたら世界が・・・

「チツ・オイ！さっさと出てきたらどうだ。そこに隠れている奴！！」

「ほお、良く気づいたな」

格好付けながら出てきたのは某運命の錬鉄の英雄が子供の姿になった感じの奴だった。

side out

side ????

俺は転生者だ。

生前にトラックに轢かれ神様という人(?)に会って錬鉄の英雄の力を貰いリリカルな世界に送ってもらった。

俺はこの世界でメインキャラにフラグを建ててハーレムエンドを目指す計画がある。

だが、それを潰すかもしれない輩がいる。

白髪の男だ。

あいつがもし転生者だったら、あの神に何かしら力を貰ってる筈だ。もし、あいつがBADエンドにするんなら。

俺が潰す！

・・・しかしあいつ本当に転生者か？見た感じただのコスプレDQNじゃねーか。

だが、今は関係ない。あのDQNが俺のハーレム計画を潰しやがって。

俺TUEEEEEな部分をあの二人に魅して救出しフラグを建てるはずだったのに・・・

「チツ・・・オイ！さっさと出てきたらどうだ。そこに隠れている奴
！！」

気づかれたか・・・ここは格好よく。

「ほお、良く気づいたな」

ふっ決まったぜ。

side out

side

・・・なんだこのガキは・・・？厨二病か？決まったぜ、なんて思っ
てんだろ絶対。

「ふっ、どうした？言葉が出ないのか？」

違えよ。呆れているだけだ。

「悪いが貴様には死んでもらう。悪く思うなよ、貴様が偉大なる俺の計画を邪魔したからな」

「計画う？」

どうせハーレム作るだなんだなんだろうな・・・とりあえず潰すか。

「そうだ、主要キャラにフラグ」取り合えずうるせえから、おまえはここで死ね」なっ！ツチ！トレス・オン同調開始」

ギリギリで干将・莫耶を投影して防いだ。

「へえー・・・やる、やるねえ！まさか避けるとは思わなかったぜ、これでも半分のスピード何だけどう、結構いい線いってるぜクソガキ」

「嘘も体外にしておけDQNがこの最強無敵のオリ主か喰らうわk」

「オラ、行くぜええー！！！」

人外の速度で間合いへ踏み込み、繰り出した拳が自称オリ主を捉える。

子供の体系では吹き飛ばされたかと思いきや、意外と耐えていた。

「このクソDQNが！舐めてんじゃねえ！！！」

「おう、そりゃ悪かったな。あんまり嬉しかったもんでよ、はしゃいでるんだ。何せ全力が出せるもんでよお、勘弁しろよ———なあ

ッ？」

刑士郎の全身から杭が飛ぶ。日陰となっている路地裏の闇がそれを覆い漆黒となって自称オリ主の全方位から襲い掛かる。無論死角からも。

だがそれらは、当たる寸前に絡めとられていた。ギチギチと軋みながら闇色の杭を縛り上げる鎖は、異空間から生えている。

「ハッ！ 貴様の攻撃なんぞ当たらんわ！！」

自称オリ主が得意げに言い張る。しかし刑士郎は自らが放った攻撃が防がれた事に、驚きはないようだった。

「（まあ、F a t e は知っているし、この位防いで貰わないとなあ・
・っしかしこの体になってからバトルジャンキーになっちまった
ようだ。さっきの誘拐犯じゃものたりねえ）」

心の内でそう思い、刑士郎はサングラスを弾き飛ばした。真紅の瞳が、紅蓮の炎の如く激烈に燃え上がる。

「楽しもうや、てめえ全力を搾り出せ。俺を退屈させんじゃねえぞ」

繰り出される右の一撃。大気を切り裂くのではなく引き千切るかのような勢いに、防御したところで突き破られると勘のいい奴は悟るだろうが。自称オリ主はそうではなかった。自分の力に自信がある表れなのだろう・・・

「コイツを破れるものか・・宝瞳の庭園」
アイギス

アイギスとはアテナ女神の持つ盾で、ペルセウスがメドゥーサの首をとりアテナに献上し、アテナはこのアイギスの真中につけたという。

アイギスは、ギリシア神話最高神であるゼウスの乳母のヤギ、アマルティアの皮を使用した盾で、その山羊の皮の加護により、破邪の力を持つと言われる。

盾としては最高ランクに位置する防具で、ゼウスの『雷霆』ケラウノスでさえ傷を付ける事が出来なかったとされる程。

ありとあらゆる攻撃を自動で防ぐと言われている。

確かにその宝具なら防ぎきれだろう。現に刑士郎の拳はアイギスを突破する事はできなかった。

安心も束の間、刑士郎から放たれた杭が迫る。必要に応じて全身いたる個所から出現する刑士郎の聖遺物は、攻撃の軌道と間合いの概念をいともたやすく破壊する。

一定以上の接近を許してしまったのはどうしようもない失態である。こと格闘戦においてなら、刑士郎を凌駕する者などそうそう存在しないだろう。

「クッっそがッ！」

アイギスを破棄し鎖を足場になんとか杭を逃れる。それを刑士郎が見逃すはずはなく繰り出される右の一撃が自称オリ主を捉え吹き飛ばしにかかる。

「……投影開始」
トレース・オン

作るのは名剣、おそらく宝具級のを大量に生産する事は慣れていないのだろう。

「工程完了。全投影待機《ロールアウト。バレットクリア》」

「凍結、解除。全投影連続層写！《フリーズアウト。ソードバレルフルオープン！》」

ドドドドドドドドドドドドッ！！！！！！

すれ違い様の攻撃。剣がひたすら総射される。ある程度刑士郎に近づくを見るやすぐさま。

「壊れた幻想」
ブローケンファンタズム

大量の剣が勢い良く爆発する。周りのコンクリートは爆発に耐えられるはずもなく大規模のクレーターを作る。

「やったか！？」

「おいおい、それはフラグだぜええ——！！」

そこには服が破れコンクリートの破片が飛び散ったりしていたが、肝心の刑士郎は無傷であった。

「いい判断だクソガキイ、俺と殴り合いは巧くねえからなあ、そりゃつまり、離れて動き回れっていうことだ。おまえ、このままいったらよう——死んじまうぜえ」

しかし刑士郎の意見を聞いていないのか干将・莫耶を投影して投げた。

「——鶴翼、欠落ヲ不ラズ（しんぎむけつにしてばんじゃく）」

その技は相手が剣を弾き、さらに干将・莫耶を投影し夫婦剣の互いに引き合う性質を利用した連続技の総称鶴翼三連である。

初見の者なら避ける、または弾くだろう。ある意味でこの技は初見殺しの技といってもいい。

しかし刑士郎はこの技を知っている。知っていて態々喰らうほど刑士郎はお人よしではない。

その剣を掴み、砕いた。

「何ッ！馬鹿な・・・」

「甘え、甘えよクソガキが。覚えたてのチャチな“形成”なんざ、俺がその気になりゃ千切れるんだよ」

「・・・しかたない・・・これを出すのは貴様が初めてだ。我が『無限の剣製』を喰らうがいい！」

そう言って彼は詠い出した。

I am the bone of my sword.

（体は剣で出来ている）

Steel is my body, and fire is my blood.

（血潮は鉄で、心は硝子）

I have created over a thousand blades.

（幾たびの戦場を越えて不敗）

Unknown to Death.

(ただの一度も敗走はなく)

Not known to Life.

(ただの一度も理解されない)

Have withstood pain to create many weapons.

(彼の者は常に独り剣の丘で勝利に酔う)

Yet, those hands will never hold anything.

(故に、その生涯に意味はなく)

So as I pray, UNLIMITED BLADE WORKS.

(その体は、きっと剣で出来ていた)

地に炎が走り世界が侵食されていく。

そこには担い手のいない多数の剣の突き刺さった赤い荒野があった。

「ハハッ！どうだ見たかこれが俺の力だ！！てめェみたいなDQNがこれから逃れる事などできねえだろ。ここが手前の死に場所だ！！！」

「クククハハアツハハハ！」

「何が可笑しい。気でも狂ったか・・・まあ無理もないかこいつ」

もう充分だ」何？」

「もう充分だ。面白かったぜ。手抜きはここで止めにするわ」

かつて何処かで　そしてこれほど幸福だったことがあるだろうか
Wo war ich schon einmal und wa
r so selig

あなたは素晴らしい　掛け値なしに素晴らしい　しかしそれは誰も
知らず　また誰も気付かない

Wie du warst! Wie du bist! Das
weis niemand, das ahnt keiner
!

幼い私は　まだあなたを知らなかった

Ich war ein Bub', da hab' ich
die noch nicht gekannt.

いったい私は誰なのだろう　いったいどうして　私はあなたの許に
来たのだろうか

Wer bin denn ich? Wie komm' den
nich zu ihr? Wie komm' den s
ie zu mir?

もし私が騎士にあるまじき者ならば、このまま死んでしまいたい
War' ich kei'n Mann, die Sinnen
mochten mir vergeh'n.

何よりも幸福なこの瞬間——私は死しても 決して忘れないだろうから

Das ist ein seliger Augenblick,
den will ich nie vergessen
s an meinen Tod.

ゆえに恋人よ 枯れ落ちろ

Sophie, Welken Sie

死骸を晒せ

Show a Corpse

何かが訪れ 何かが起こった 私はあなたに問いを投げたい

Es ist was kommen und ist was
geschehn, Ich mocht Sie fragen

本当にこれでよいのか 私は何か過ちを犯していないか

Darf's denn sein? Ich mocht's
ie fragen.. warum zittert was
in mir?

恋人よ 私はあなただけを見 あなただけを感じよう

Sophie, und seh' nur dich und
spur' nur dich

私の愛で朽ちるあなたを 私だけが知っているから

Sophie, und weis von nichts
s nur.. dich hab' ich lieb

ゆえに恋人よ 枯れ落ちろ

Sophie, Welken Sie

創造

B r i a h

死森の薔薇騎士

D e r R o s e n k a v a l i e r S c h w a r z w a l d

謳う刑士郎を中心にして、周囲の移送がズレていく。
アメーバのように揺らめく闇。世界が夜に包まれていく。
固有結界の地面がひび割れ、枯渴し、粉碎された。

「いったい・・・何が起きているんだ。ここは俺の世界だぞ」

剣が砂になって朽ちていく瞬間、爆発する深い闇――

白貌を喜悦に歪め、高らかに謳う刑士郎。

凶暴に、放埒に、この上もなく満足げに――

呪言が、ここに完成した。

「――――ッ!？」

彼の固有結界内なのに夜が生まれていた。通常の夜よりなお深く、
さらに厚く。

総てを枯渴させる死森のヴェールはその昏さを増し、月は煌々と紅
く輝きだす。

明るさと暗さ。それらが共にいや増す空間。

術者の根源ともいえる渴望を、原則ルールに変える異界創造。

すなわち―――覇道型の創造であった。

「なぜ・・・なぜ俺の世界が消えたッ!!」

「それは当然だろう？知らなかったのか、同じ霸道型の創造がぶつかればより強い意志が勝つ、これが闘ぎ間いだ。

てめえの世界を塗り替え俺の世界を作る俺の意思。それをさせんとするてめえの意思。その激突で互いの領域を奪い合う。

てめえは俺の意思に負けたんだよ。もうちょっと頑張ると思えば。

あっさり——」

黒いコートが夜に融ける。

白い手袋が。髪が。肌が。闇に浮かび上がるように、刑士郎は夜と同化していく。

「おまえは死ぬ。ここまで楽しませてくれた札を込めて、加減はしねえ。せいぜい足掻けや」

「————」

轟音を共にそれは炸裂した。

一気に獣メートル近く跳躍し、月を背に舞う刑士郎の両腕から、杭が連続して放たれる。

バルカン砲にも匹敵するその速度。

音速を超えるパイルバンカーの蓮撃は、大地を瞬時に剣山の様相へと変えていた。もはや絨毯爆撃といっても過言ではない。

「避ける避ける避ける避けろオ！豚みてえに逃げ回ってよお、俺を絶頂させろやッ！止まるんじゃねえ！」

狂笑と共に、なおも連続する杭の嵐。それを紙一重で躲しながら、

自称オリ主は己の体力、魔力が刻一刻と削られていくのを感じていた。

死森の薔薇騎士（ローゼン・カヴァリエ・シュヴァルツヴァルド）

——刑士郎が創りだしたこの空間で、彼以外の者は搾り取られる餌にすぎない。

足場となるコンクリートの道路は徐々に砂と化していき、何もせずとも自称オリ主は精気を奪われていく。

加え——

「ハッハア——ッ！」

着地と同時に攻めて込んでくる刑士郎のスピードは、明らかに先ほどよりも上昇していた。

ここが彼の世界だというのなら、地力にプラスの補正がかかるのも頷ける。

闇に強化される吸血鬼の戦闘力は、夜になる事でさらに上がっていた。

「——ゾッ、オオ」

飛んでくる杭も、繰る出される拳も、蹴りも——目視する事はほぼできない。

加えて、深い闇が保護色となり、攻撃の筋を隠している。直撃すれば一撃死に近い威力を持つ刑士郎と聖遺物にとって、ここは確かに必殺の空間と言えるだろう。

死の荊棘で編まれた夜は、薔薇の騎士を無敵に変える。

「クソ・・・こうなったら」

自称オリ主は焦りながら飛んでくる杭や拳をいなし、逆転の手を考える。

残り少ない体力、魔力で奴を倒すには・・・

「約束された勝利の剣でやるしかない」
エクスカリバー

それを直感で感じ取った。

対吸血鬼用の礼装は投影する事はできない。

黒鍵で何度か迫り来る杭を防いできたが、今の奴には通用しないだろう。

自分の直感を信じ最強の幻想の投影ラスト・ファンタズムに入る。

「・・・・・・クハッ。

ハハ、カハハハ、ハハハハハハハハハッ。

アハハ、ハハハハ、ハハハハハハハハハハ——ッ！

——面白エなアッ！」

哄笑と共に発した狂喜の念が伝わった、どうやら彼は待ってくれるようだ。

「ああ、ああいいぜ。受けてやらア！ ガキの遊びにや付き合ってやるのが、大人の・・・・余裕ってもんだからよオ。

来いよ、宴もたけなわだ。ここで派手にやろうじゃねえか。てめえの魔力はこの場で喰ってやるからよ、出来るもんなら俺の腹も裂いて見やがれ」

「創造の理念を鑑定し、

基本となる骨子を想定し、
構成された材質を複製し、
制作に及ぶ技術を模倣し、
成長に至る経験に共感し、
蓄積された年月を再現し、
あらゆる工程を凌駕し尽くし——
ここに、幻想を結び剣と成す——！」

手に持った剣はそもそも美しいのではなくてひたすらに尊い。これが人々の「こうであって欲しい」という想念が星の内部で結晶・精製された神造兵装であり、最強の幻想。
ラスト・ファンタズム

彼は一步踏み出し。次いで、一気に加速した。

「——来るか。来るか来るか来いよオ！」

「おおおおおおオオオオ——ッ！約束された勝利の剣^{エクスカリバー}……！」

轟く雄叫びが、深い夜を震撼させ、手に持つ剣からは黄金の奔流が流れ出した。

両者の生死を分かち一瞬——心臓に走る薔薇の杭を、刹那の後に待ち受けて……

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「・・・・・・ごふっ」

彼の胸の中心部から杭が突き出る。

「ああ・・・・まあこんなものだ」

心なしか切なげそうに言って、刑士郎は吐息をもらした。

「もう少しやれるかと思ったが、割りにあっけねえ締めだったな。
てめえの負けだよ、言うことはあるか？」

言うまでもなく致命傷で、既に勝負は決していた。

「・・・・ツ、は・・・・」

ゴキゴキと音を立て、さらに杭が埋まっていく。刑士郎の手が背中へ貫けた。

「何もねえなら、これで終わりだ。あばよクソガキ、最後は焦った
がそれなりに楽しかったぜ

—A u f W i e d e r s e h、n (あばよ、くたばっちまえ)「
アウフ・ヴィーダーゼン

吸い尽くしたと同時に彼は砂となり消えていった。

そして餌がいなくなった夜は次の獲物を見つけるかのように静かに崩れていった。

転生者との出会い（後書き）

戦闘巧くかけてるといいな・・・

錬鉄の能力って似てませんか？

投影が形成で、固有結界が創造ってな感じに・・・

俺だけですかね・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8574z/>

リリカルな世界に転生したらしい

2011年12月31日04時45分発行